

2. 事業の概要と成果				
(1) プロジェクト目標の達成度 (今期事業達成目標)	上位目標：ガザ地区において心的外傷が放置されず、適切な心理社会的ケアが提供され PTSD が予防される。 プロジェクト目標：ガザ地区における心理社会的ケアモデルが確立される。 ＜達成度＞ 「心理社会的センター」(以下、センター)を設立し、同センター内でファシリテーター研修(活動3)を年間31回、PSOP研修(活動2)を3グループ計96回実施し、合計80人のファシリテーターおよび心理社会的ケア(以下PSC)の知識を持った人材(以下、PSOP)を育成した。また、48人(子ども24人、大人24人)にPSCプログラム(活動4)を行なった結果、PTSDを発症した対象者はおらず、開始時に一部症状が見られた対象者については、症状の改善が認められた。 また、普及促進活動(活動5)によって、関係者らにセンターの意義とPSCの必要性を認識してもらうことができた。以上のことから、ガザの状況とニーズに応じたPSCモデルの基礎が築かれ今期事業目標を達成することができ、プロジェクト目標および上位目標実現に寄与したと判断される。			
	今期事業達成目標： ガザ心理社会的センターを拠点とした心理社会的ケアモデルの基盤が整備される。			
(2) 事業内容	1. ガザ心理社会的ケア拠点の体制整備 1-1. ガザ心理社会的センターの設置 (1年次) 提携団体であるエル・アマル社会復帰協会本部の4階建4階部分(現地でいう3階)を改装した。5月に発生した空爆で約3週間工事が中断し、空爆後の物資不足や価格高騰で資機材の調達が困難となったが、幸い活動への大きな影響はなく、9月中旬に完成し、利用開始した。			
	1-2. センターの利活用 ①心理社会的ケア人材とファシリテーター養成研修の実施 (1、2年次) センター完工後、センター内でPSOP研修(活動2)ならびにファシリテーター養成研修(活動3)を実施した。詳細は下記2および3に記載。 ②PSCプログラムの実施 (2年次) →2年次の活動 1-3. 情報管理体制の整備 (2年次) →2年次の活動 1-4. テキストの作成 (2年次) →2年次の活動 1-5. 映像制作を用いた「映画ワークショップ」の実施 (2年次) →2年次の活動 2. PSOP育成(センター内部での活動) (1年次、2年次) ラファ市およびハインユニス市の小学校、教育機関、社会福祉団体の従事者68人(第1クール24人、第2クール22人、第3クール22人、男性8：女性60)が2ヶ月コースに参加し、計画通り計24回の研修を実施した。2ヶ月コース参加者全員が3ヶ月、4ヶ月コースに進み、それぞれ12回の研修を実施した。3ヶ月、4ヶ月コースについては、当初2ヶ月コース修了者の半分程度の進級を想定していたが、全員が進級を希望し、レベルも活動進行上も問題ないと判断し、全員進級させることとした。(実施結果は以下表にも(→)で記載。)さらに、実践力を養うため、活動3ファシリテーター研修の実践の場に補佐として参加した。 また、予定していた桑山専門家の渡航による直接指導ができなくなったため、代わりに、オンラインによる指導を9月～12月にかけて4回実施した。			
＜概要＞				
	2ヶ月コース	3ヶ月コース	4ヶ月コース	

	内容	基礎的概念と、3次元表現までを習得。	2ヶ月コース終了後に4次元表現（音楽）までを習得。	3ヶ月コース終了後に4次元表現（映画）までを習得。
		※各単元詳細は、別添PSC研修概要参照。		
スケジュール	週1回×8単元／1コース×年3回＝計24回 →実施済：24回	週1回×4単元／1コース×年3回＝計12回 →実施済：12回	週1回×4単元／1コース×年3回＝計12回 →実施済：12回	
受講者数	10～15人／1グループ×2グループ＝20～30人／コース×年3回＝年間合計60～90人 →受講者数：68人	8人～10人／1グループ×年3回＝年間合計24～30人 →受講者数：68人	8人～10人／1グループ×年3回＝年間合計24～30人 →受講者数：68人	
対象者	学校や医療現場、地域活動現場の従事者 →ろう学校の教師、保健福祉サービス従事者 （対象者の所属団体とはMOUを締結）	2ヶ月コース終了者から右コースの評価を踏まえ選定。	3ヶ月コース終了者から右コースの評価を踏まえ選定。	
指導者	現地スタッフ（弊団体ファシリテーター）6名が1グループ2名体制で対応。			
実施場所	活動1で設置するセンター内。 （センター完工までは、別の場所で実施した）			
その他	受講者は、便宜上同じ学校や施設単位で集めて1グループとするが、個別参加も受け入れる。属性単位でまとめることで効率よく学べる一方、知識が限定的、偏向的となることから、年1回プログラムの最後に、全受講者が一堂に介してグループワークを行い、知識の平準化と充実化を図る。桑山専門家が同時期に渡航し指導する。 →2022年2月にグループワークを実施した。桑山専門家の渡航のタイミングを合わすことが困難だったため、オンライン指導に切り替えた。			

3. ファシリテーター養成(センター内部での活動)(1,2年次)

ラファ市およびハインユニス市の小学校、社会福祉団体の従事者12人（男性8、女性4）が参加し、31回の研修を実施した。（実施結果は以下表にも（→）で記載。）当初計画の35回から4回少なかったのは、5月の空爆と新型コロナウイルス再拡大による規制で実施できなかったためである。不足分は一部研修を1回にまとめ（粘土を4回→3回、ジオラマを5回→4回等）、不足を補う内容に変更することで、計画通りの成果達成することができた。また、本事業のプログラムに参加していない子どもを対象とした実践研修も実施した。

<概要>

コース	週1回計35回／年間、12人／1グループ。 →実施済：31回、12人／1グループ
実施要領	週始めの日曜に単元を学び、同じ単元を週後半の水曜、木曜にOJTとして活動4のPSCプログラムに参加し（全単元ではなくピックアップして数回実施）、実践力を身につける。詳細は別添1:Annual Activity Planおよび別添3:PSC研修概要参照。
対象者	メンタルヘルスケアに関わる団体から選抜 →ラファ市およびハインユニス市の保健福祉サービス従事者（対象者の所属団体とはMOUを締結）
指導者	現地スタッフ（弊団体ファシリテーター）6名が1グループ2名体制で対応。

実施場所	活動1で設置するセンター内。 ※センター完工までは、別の場所で実施した。
------	---

4. PSC プログラムの実施

4-1：PSC ワークショップ（1年次、2年次）

サイトA（子ども対象）は、①提携団体が運営している聴覚障がい児のための学校に通う9-12歳の聴覚障がい児13人（男子6、女子7）、②ラファ市内の公立小学校に通う9-12歳の健常児11人（男子3、女子8）、2グループ計24人が参加し、29回のワークショップを実施した。

サイトB（大人対象）は、①16-17歳の思春期の女性12人、②18-50歳のアクセス制限のある国境地帯にジェンダーに基づく暴力（Gender-based violence: GBV）の被害女性12人、2グループ計24人が参加し、29回実施した。

当初計画の35回より少なかったのは、上記活動3同様、5月の空爆と新型コロナウイルス再拡大による規制で実施できなかったためである。教育省が一定期間子どもの域外活動を禁止する措置を取ったことも影響が大きかった。

不足分については、一部研修を1回にまとめ（粘土を4回→3回、ジオラマを5回→4回等）、不足を補う内容に変更することで、計画通りの成果達成することができた。（実施結果は以下表にも（→）で記載。）

<概要>

実施要領	1) サイトA：子ども対象 2) サイトB：大人対象 A、B共に週1回計35回／年間、8～12人／1グループ×2グループ。 （計4グループ最大48人） 先行事業では1グループあたり約20人全148人の子どもを対象としたが、本事業では1グループあたりの対象人数を半減し対象者一人一人に向き合うことで、ケアの質の向上を図る。（※現地のCOVID-19対策の人数制限や措置も考慮。） →実施済：子供29回（24人）、大人29回（24人）
対象者	サイトA：これまで対象としていなかった国境地帯に住む子ども（健常児および聴覚障がい児）。 サイトB：16-17歳の思春期の女性12人、18-50歳のアクセス制限のある国境地帯にジェンダーに基づく暴力（Gender-based violence: GBV）の被害女性（対象者の学校や所属先とはMOU、家族とは同意書を締結。）
指導者	現地スタッフ（ファシリテーター）6名が1グループ2名体制で対応。 加えて、先行事業で育成したファシリテーターも補佐として参加。人材を有効活用し、層を厚くすることで安定的なケア提供を行えるような体制構築を目指す。
実施場所	1年次はセンターの外部で実施。（2年次は、ケア提供拠点としてセンターの機能を強化するため、センター内部で実施予定。）

4-2：相互理解アクティビティ（1年次、2年次）

サイトA（子ども）、B（大人）合同で5日間の集中ワークショップ（サマーキャンプ）を7月24日～29日に実施し、対象者47人とその家族、計163名が参加した。新型コロナウイルス蔓延による行動制限や治安状況を見ながら実施の可否を探っていたが、計画どおり開催することができた。安全確保の上、ビーチへの遠足も決行した。

<参加者の声>

- ・色々な活動を通して新しい友情を築くことができた（子ども）
- ・自宅で家族と過ごすことが多く、最初は不安だったが、外で様々な世代の人と一緒に過ごす中で気持ちを開放することができ、前向きになれた（大人）

- ・母親がいないと何もできなかった子が、自分の助けなしで、他の仲間と新しいことにチャレンジし、交流している様子が嬉しかった。（保護者）

屋外の公共の場で行うサマーキャンプは、開放的になれる一方、心のつかえとなっているガザの現実と向き合わざるをえない環境下で行うため、通常のセッションに加え、自己表現力を更に高めるとともに、より大きなグループ（健常児と聴覚障がい児の交流、家族間の交流等）での共同活動を通じて他者に耳を傾け、相互理解力を高めるのに有益な機会となった。特に5月の空爆や新型コロナウイルス蔓延による行動制限で多くの裨益者が心の自由を奪われていた中で実施できたことは、心の整理を進め、向き合うための重要な機会となり、事業後半の活動に良い効果をもたらした。

<概要>

日程	内容	参加者
1～4 日目	ワークショップ [スポーツ] 芝生広場でサッカーなどの球技等 [物語] 童話を読んで感想を話し合い、物語を作り出す [工作] 塗り絵、粘土、ペーパークラフト等 [音楽] 歌遊び、合唱、合奏、発表会 [演劇] パペット演劇等を通じ演じる楽しさを体験	子ども：24 名 大人：24 名 家族：96 名 臨時スタッフ：10 名 団体スタッフ：9 名 計：163 名
5 日目	遠足（子ども） 海水浴、ボート乗船体験、昼食、語らいと集団遊び	子ども：24 名 家族：48 名 臨時スタッフ：5 名 団体スタッフ：9 名 計：86 名
6 日目	遠足（大人） 内容は同上	大人：24 名 家族：48 名 臨時スタッフ：5 名 団体スタッフ：9 名 計：86 名

4-3：保護者（家族）との面談

子どもの保護者 12 人（父親 2、母親 10）を対象に、2021 年 9 月 12 日、2021 年 11 月 8 日、2022 年 3 月 1 日の 3 回実施した。1 回目は、保護者に PSC の方法論を紹介し、子どもたちの心理社会的ニーズや本プログラムが貢献できることについて説明を行った。2 回目は、中間フォローアップとして、各子どもたちの課題や行動について話し合い、プログラムが子どもたちに与えた効果について、保護者からフィードバックを受けるとともに、子どもたちの心理社会的発達を家庭内で支援するためのツールやテクニックを伝えた。3 回目は、全ワークショップ修了後に実施し、保護者から最終的なフィードバックを受けた。保護者からは、子どもたちの自信が向上し、全ての保護者が、子どもたちの不眠や暴力行為、コミュニケーション欠如などの問題行動が改善されたと回答。保護者自身も子どもたちに向き合うための有効な方法を学べたと語り、子どもたちへのプログラム提供に加え、家族にも活動を広げてほしいという強い要望があった。

なお、大人の裨益者については、全員が夫の暴力や家族との関係に問題を抱えているため、裨益者の安全を考慮して直接の介入は望ましくないと判断し、保護者面談は実施しなかった。

4-4：最終発表会（1 年次、2 年次）

2022 年 3 月 22 日、プログラムの集大成として実施し、プログラム参加者および研

	<p>修生が成果を披露した。保護者や学校関係者、政府関係者、NGO、国際機関等 288 名が来場した。</p> <p>5. PSC の普及促進</p> <p>5-1：関係者合同意見交換会の開催（1 年次、2 年次） 2021 年 11 月 3 日、6 つの関係機関と開催した。PSC とそのアプローチを紹介し、活動の進捗およびセンターの戦略について報告するとともに、今後の活動計画と連携について意見交換を行った。 （参加機関：パレスチナ教育省、ラファ市教育委員会、ラファ難民キャンプ小学校校長、メンタルヘルスを扱う地元機関（Neighborhood Committee of Abasan Al Jadida、Brilliant Future Association）、子どもの支援を行うスイスの国際機関（TDH-LOZAN））</p> <p>5-2：関係機関・行政機関とのミーティング（1 年次、2 年次） プログラム参加者や研修員選定で協力している 5 つの地元機関、国際 NGO、パレスチナ教育省、ラファ市教育委員会らと、2021 年 9 月 15 日、12 月 15 日、2022 年 2 月 14 日の 3 回実施した。また、2021 年 12 月 10 日には、ラファ市長と、センターの広報戦略について意見交換を行った。</p> <p>5-3：広報活動 （リーフレットとホームページの作成、メディア出演）（1 年次、2 年次） ・リーフレットとホームページを英語、アラビア語で作成した。 ・2021 年 12 月 25 日と 2022 年 1 月 4 日の 2 回ラジオ番組に出演した。 ・活動のプロモーションビデオを作成し、最終発表会で上映した。</p> <p>5-4：映画上映会（2 年次）→2 年次の活動</p>
<p>（3）達成された成果</p>	<p>●期待される成果 1： 心理社会的ケアを提供するための体制が整備される。 <u>指標 1-1</u>：心理社会的ケアセンターが設置される。 <成果> 7 月中旬完工し 9 月中旬資機材納入完了した。（別添①施工レポート参照）</p> <p><u>指標 1-2</u>： ①センター内で活動 2、3 の研修が計 70 回以上実施される。 <成果> 活動 2 で 48 回＋活動 3 で 31 回＝計 79 回センター内で研修を実施した。 ②センター内で活動 4 のプログラムが計 70 回以上実施される。（2 年次） →2 年次の活動</p> <p><u>指標 1-3</u>：ケア対象者および研修生の情報リストが作成される。→2 年次の活動</p> <p>●期待される成果 2： 心理社会的ケアの基礎的な知識を身につけた人材が養成される。 <u>指標 2</u>： 2 ヶ月～4 ヶ月各コースの終了時に習熟度テストを実施し、全員が 75 点以上を確保する。 <成果> テストの結果、全員が 80 点以上、平均 90 点を獲得した。（別添②PSOP 習熟度テスト結果、および別添③専門家報告書参照）</p>

	<p>●期待される成果 3： 心理社会的ケアの専門知識を持つファシリテーターが養成される。</p> <p><u>指標 3-1：</u> コースが終了時にファシリテーター養成専用の習熟度テストを実施し、全員が 70 点以上を確保する。</p> <p>＜成果＞ テストの結果、全員が 91 点以上、平均 98 点を獲得した。 （別添④ファシリテーター習熟度テスト結果、別添③専門家報告書参照）</p> <p><u>指標 3-2：</u> 現地スタッフ（弊団体ファシリテーター）がチェックリストを用いて担当する研修生の習熟度を判定し、全員が 80%以上の評価を得る。</p> <p>＜成果＞ 判定の結果、全員が 90%以上の評価を得た。（別添⑤ファシリテーター評価結果、および別添③専門家報告書参照）</p> <p><u>指標 3-3：</u> 研修生による本事業外での PSC 実践が 2 事例以上報告される。</p> <p>＜成果＞ 2 事例以上の報告があり、目標を達成した。 別添⑥ファシリテーター研修生実践レポート</p> <p>●期待される成果 4： ケア対象者の PTSD の完全発症の予防または一部発症の場合は症状が改善する。</p> <p><u>指標 4-1-1：</u>心の健康度を計る GHQ¹と、ファシリテーターが観察結果や保護者、関係者らの情報を基に対象者の変化を記録する PTSD チェックをプログラム前後に実施。 ①GHQ：平均値の差を比較する t 検定において有意差を示す p 値が 0.05 以下となること。 ②PTSD：事後チェックで項目数が 1 つ以上減少。事前チェックで当てはまる項目がなかった場合は、事後チェックにおいても該当項目がなしとなること。</p> <p>＜成果＞ 参加者 48 人中有効回答 38 人に対して分析を行った。（無効 10 人は家庭の事情や体調等で事前、事後の検査のどちらかが実施できなかったため） 結果は以下の通り。 GHQ：t 検定において p 値が 0.01 以下という高い有意差が示され目標達成した。 PTSD：2 名の除く全員が事後チェックで 1 つ以上減少した。増加した 2 名についても、検査の有効性に問題となるものではないと判断されるため、目標を達成した。 （別添③専門家報告書（別紙-1GHQ と PTSD 結果解析）参照）</p> <p><u>指標 4-1-2：</u> ナラティブレポート²で、対象者の改善事例がサイト A、B2 事例以上報告される。</p> <p>＜成果＞ 2 事例以上の報告があり、目標を達成した。 別添⑦ナラティブレポート</p> <p><u>指標 4-2（活動 4-2～4 共通）：</u></p>
--	--

¹ GHQ：一般健康質問紙（General Health Questionnaire）。本事業では GHQ12 問版を桑山医師が子どもたちに合わせて改変した「Kuwayama-12」を使用し、便宜上こちらを「GHQ」と表記している。

² ナラティブレポート：プログラムを通して生じた変化を子どもたちの物語としてファシリテーターの視点でまとめた報告書

プログラムの最後に保護者および関係者全員にアンケートを実施し、75%以上がPSC プログラムが有効であったと回答する。

<成果>

アンケートは保護者（子どもの裨益者のみ）および最終発表会に参加した関係者に紙面および聞き取りにて行い、全ての参加者が「有効であった」と回答した。特に保護者からは、子どもの問題行動が改善されただけでなく、子どもへの最善の対応について専門的な助言を受けることができたことや、面談やサマーキャンプを通じて他の保護者と意見交換できたことに高い付加価値を感じたという声が多く聞かれた。また今後期待することとして、裨益者だけでなく、保護者にも活動を拡大してほしい、家族単位でフォローしてほしい、地域のカウンセラーや学校、医療機関との連携をもっと強化しては、といった提言があった。

●期待される成果5：

心理社会的ケアへの理解が向上し、その拠点としてセンターが認知される。

指標 5-1：関係者合同会議において、70%以上がPSC への理解とセンターの必要性を示す回答をする。

<成果>

アンケートは紙面および聞き取りにて行った。参加者全員が、ガザ南部地域におけるPSCの高いニーズと支援不足のギャップが大きいことを問題視しており、PSCとセンターの重要性が高いことを確認。パレスチナ社会、特にガザの人々の心的苦痛に対応するため、官民の枠を超えてガザ全体でPSCの戦略を構築することが推奨された。特にコミュニティの意識改革と、コミュニティへより踏み込んだ民間レベルの介入が必要であることを確認。それには次年度事業で作成予定のPSCマニュアルの活用が有効であることや、裨益者の個別ニーズを適切にサポートするため支援機関を跨いだネットワークを活性化させることが重要であると結論付けた。結果、指標の70%以上を超える参加者全員がPSCとその必要性について理解を示した。

指標 5-2：関係者との面談

- ・行政関係者：1回以上
- ・関係機関（他の連携可能性のある機関やドナー等）：2回以上

<成果>

ラファ市と2回、関係機関（ラファ市およびパレスチナ教育省等行政機関含む）と3回実施した。これとは別に、裨益者および研修生選定でMOUを締結した5つの地元社会福祉団体と月1回のペースで定期的に面談を行った。

指標 5-3：

- ①リーフレットとホームページの作成
- ②年3回以上のラジオ出演または新聞掲載

<成果>

リーフレット：別添⑧リーフレット（アラビア語、英語）

ホームページ：<http://www.elamalpcc.ps>

ラジオ出演：2021年12月25日と2022年1月4日の2回ラジオ番組に出演した。（添付書類5写真およびFacebook投稿
(<https://www.facebook.com/Frontline.Palestine/>)

指標 5-4：映画上映会で、参加者の70%以上が、映画を通じてPSCへの理解が深まったと回答する。→2年次の活動

<p>(4) 持続 発展性</p>	<p>今年度の活動を踏まえ、成果を維持していくための計画について以下3点に言及したい。</p> <p>(1) ファシリテーターおよび PSOP の人材育成 本事業では12名のファシリテーター（PSC 実践者）と、68名の PSOP（PSC の基礎知識を持った人材）の人材育成を行なった。多くの人が心のケアを必要とするガザにおいて、2021年5月に発生したイスラエルとの衝突では、子ども66人を含む256人が死亡、11万人が住む家を失い、ガザ人口の3割を占める約60万人の子どもや若者が PTSD の症状もしくはその危険にさらされたと報告されており、一層心理社会的ケアの必要性が高まった。一方で、それに応えるだけの人材不足が浮き彫りとなっている。5月の空爆直後には国内外多くの支援機関がガザに入って緊急措置的な PSC が行われたが、心的外傷は一朝一夕に回復するものではない。長期に渡って継続的なケアが必要であるにもかかわらず、本事業のように、一人の裨益者に長期間かけて PSC を行う団体や人材は少ない。そのため、次年度は、今年度育成した人材が各現場で行う PSC を引き続きフォローし、現場のニーズに則した、より実践的な人材を育てていく。また、今年度は主に研修生を学校や社会福祉現場の従事者を対象としていたが、次年度は医療現場からも募ることを検討している。教育、社会福祉、そして医療現場と、多角的にアプローチすることで、PSC の定着と成果の持続発展を図る。</p> <p>(2) 裨益者選定 今年度は、子ども、青年（10代の思春期の女性）、大人（18-50歳 GBV 被害女性）をターゲットにしたが、各裨益者がかかえているトラウマは、家族に起因することが多く、家族単位でケアが必要な場合が多く見られた。保護者面談やサマーキャンプなど家族の参加は活動に取り入れているものの、あくまで裨益者のフォローにとどまっている。上記の通り、保護者からも家族単位で支援を受けたいとの要望が強いことから、次年度は可能な限り家族単位での支援や裨益者選定を検討しており、家族単位で包括的にケアを行っていくことが成果の持続発展により効果的と考える。</p> <p>(3) センターの体制強化と維持管理 センターは提携団体であるエルアマル社会復帰協会本部ビルの一角に設置した。複数年事業の最終年度となる次年度は、譲渡後の継続的な自立運営に向け、段階的に引き継ぎを行うと共に人材面の体制強化を図る。一人目は、技術面からサポートするケースマネージャー。今年度活動中、本事業では対応できない特別な個別ケアを必要とする裨益者が3名確認され、他の支援機関や病院を紹介した。ケースマネージャーを入れることで、本事業の PSC が裨益者にとって適切かを現場で確認し、必要に応じて最適なケアへスムーズに移行できるようなり、関係者合同会議で提起された支援機関を跨いだネットワーク構築を可能にする。二人目は、運営管理面からサポートする MEAL オフィサー。MEAL とは、「Monitoring（モニタリング）, Evaluation（評価）, Accountability（説明責任）, Learning（学習）」を指し、人道支援において、実施するプログラムが国際基準を満たしているかを検証し、実施団体内外の調整を行い、支援の品質管理や説明責任を促進するプログラム管理の1つであり、人道支援を行う多くの国際機関が取り入れており、支援の質の管理と成果の維持に不可欠な存在である。以上2名の追加人材登用によって、センターの意義と持続運営を堅実なものにしていく。</p>
-----------------------	---